

条痕紋系土器様式の研究

永井宏幸

条痕紋系土器様式とは、中部地方に広がりをもつ弥生時代の広域土器様式である。淵源は愛知県内を中心に分布する貝殻を原体とするいわゆる「二枚貝条痕紋土器」にある。その後、弥生時代前期後半から中期中葉にいたる時期を中心に、中部地方各地域の在来系土器と交流をもちながら、地域独自の型式を存続させる。

まず、条痕紋系土器を概観する。土器様式の枠組みとして、形式、紋様と原体について言及する。この枠組みを踏まえて、条痕紋系土器様式を第1～4様式に設定し、変遷過程を示す。具体的には、土器様式の拡がりを各地域の型式から検討し、条痕紋系土器の有無を点検する。これらの作業を通して、土器様式の適応範囲が確認できよう。つぎに、条痕紋系土器様式のなかで特徴的な土器、「内傾口縁の土器」に注目する。遠隔地に出土する意味を容器の特異性、つまり内容物が重要だと指摘する。最後に、条痕紋系土器様式の適応範囲を確認するなかで、派生した問題を3つ提示し、展望とした。

問題の所在

条痕紋系土器の研究は、その初期段階から、弥生時代の始まりを意識していた。条痕紋系土器は突帯紋系土器に系譜をもち、型式変化も漸進的であることがわかっていった。いや、当初は縄文時代晩期として捉え、条痕紋系土器は弥生土器ではないとも言われてきた。

この問題を究明するため、名古屋市西志賀貝塚の発掘調査が、多くの研究者により行われた。「西志賀合戦」ともいえる同じ遺跡の同じ地点、しかも隣り合わせのトレンチでお互いの成果を競っていた(奈文研 2002)。

ところで、西志賀貝塚の調査成果をもとにいち早く文化の接触・複合を唱えたのは、小栗鐵次郎と吉田富夫であり、これを継承した紅村弘である。のちに紅村は「煮沸形態連係論」、「条痕顕示論」などを立脚し、土器から人の問題に発展させている(紅村 2005a・b・c など)。

しかし残念なことにこれら西志賀貝塚の調査成果は、一部発表されたに過ぎない(紅村ほか 1958・杉原ほか 1960 など)。調査および採集により得た土器にいち早く検討を加えたのは吉田富夫らのほかに、東京考古学会『考古学』の

誌上で展開した小林行雄らがいる(小林・藤澤 1934 など)。小林は西志賀貝塚資料と同時期資料の汎西日本的検討、つまり遠賀川系土器の伝播論について検討を進めていた。吉田の西志賀貝塚に立脚した、縄文から弥生への文化の接触・複合論とは対照的である。

西志賀貝塚のほか、高蔵貝塚や二反地貝塚(貝殻山貝塚を含む朝日遺跡の一部)の調査成果も見逃せない。久永春男が提唱した二反地貝塚の貝層の層序による二反地一式から三式の時期区分は重要である(久永 1966)。佐原らの提示する近畿の第一様式古・中・新(佐原 1967 など)に、明確な証拠つまり層位学的検討を基に示すことにより、当地域の研究の先進性を固守した。ただ残念なことに、二反地貝塚の正式報告はない(久永 1965)。いずれにしても、1960年代までに多くの議論が東西日本の接触地域として位置付けるため、盛んに行われたことは確かである。

さて、条痕紋系土器の研究に議論を立ち返ろう。条痕紋系土器にはじめて型式名を示したのは久永春男である(久永 1953)。水神平式を含めた条痕紋系土器の代表的な論考について以前触れたことがある(永井 1993・2003)。ここでの議論は条痕紋系土器の定義に焦点を絞って進

めていく。

大参義一は条痕紋系土器について、二度見解を示した。

条痕による器面調製と施文を特徴として形成された(中略)弥生式文化に接しながら純粹弥生式土器の形式的特徴を殆ど残さない(中略)斉一性の様式概念で把握される(本稿追加:土器群を)ここではかりにこの一群を条痕文系土器とよぶ(大参 1954)。

晩期後半にいたって西日本的な斉一性の中に包括されていく過程において、東海地方西部を中心とするより広い地域に、弥生時代前期にいたるまで、連続的な一つの土器文化すなわち条痕文系土器文化が継起した(大参 1972)。

大参(1954)は「弥生式文化に接しながら」としていることから、縄文晩期後半は含まない。その後大参(1972)は「晩期後半(中略)弥生前期にいたるまで、連続的な一つの土器文化」として捉えている。つまり突帯紋系土器出現期から条痕紋系土器の範疇とした。

一方、石黒立人は大参(1954)に拠りつつも具体的な定義を目指した(石黒 1985a・b)。それは、貯蔵形態と煮沸形態の組み合わせを重視することにより、森本六爾以来の「弥生土器」の認識に近づけた。これに「条痕による器面調整と施紋を特徴」とし、「単独器種のみ条痕を有する土器群」については条痕紋系土器の枠外とした。

条痕紋系土器の研究は 1985 年に開催されたシンポジウム「〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題」(以下条痕紋シンポ 85 とする)および『資料編 I』(愛知考古学談話会 1985)とその 3 年後に刊行された『資料編 II・研究編』(愛知考古学談話会 1988)が転換期となった。ここではその後の研究につながるいくつかの論点を加えて『研究編』を紹介していこう。

紅村は研究史の整理をするなかで、「煮沸形態論」と「条痕顕示論」のオリジナリティーを主張した。先に示した紅村の真骨頂は「条痕系土器」の理解に立脚した解釈・叙述であり、その到達点が 2 つの論点へとつながる(註 1)。

増子は条痕紋系土器の編年が浮線紋系土器に

偏重することを指摘し、「条痕文土器群に伴う東北系の土器」を既存の資料から再検討した。その後、西日本各地で確認されている浮線紋系・北陸晩期・亀ヶ岡式の各土器様式は突帯紋系土器様式の広域土器編年研究の俎上にあがり、度々議論の対象となっている。

増子の目指した隣接する土器様式である浮線紋系土器を用いるのではなく、亀ヶ岡式土器(増子のいう東北系土器)を検討の対象としたことは、吉胡貝塚の調査以来の検討課題である。東西日本の広域編年網の確定を目論んだ条痕紋系土器様式の位置付けは最近低調気味だ。ここ数年資料の増加した飛騨地域からの検討が鍵になると思う。具体的には、五貫森式から檜王式併行の土器型式、阿弥陀堂式(大江 1965)の再検討が急務である。阿弥陀堂式は馬見塚式から檜王式併行の段階に搬入品として琵琶湖周辺などで確認できる。既往資料の希少さから、議論の俎上に上がらなかった阿弥陀堂式も今後注目していくべきである。

最近刊行した『いちのみや考古』終刊号掲載の鈴木正博による論考は注目できる。南東北から岐阜県阿弥陀堂遺跡さらに愛知県西浦遺跡出土の「浮線文系土器群」を再検討している(鈴木 2006)。

神村透は「浮線渦巻紋土器」を取り上げた。西志賀貝塚で紅村が発見した土器で、杉原莊介の刊行した『考古学集刊』第 3 冊に掲載されたのが最初である(紅村 1949)。神村は集成を行い、その上で紋様と器形を中心に変遷・編年をおこなった。その後の調査により北陸など分布範囲が広範囲に拡がった。小型精製特殊壺として取り上げられるものの、近年積極的な評価が少ない。久田正弘や石川日出志によって大地系土器と同一土器型式として認識される。紋様と分布に接点が見出せる以外は積極的な根拠はない(永井 2003)。むしろ両者は変容壺であること、それぞれの様式(系統)から出現期の検討を評価する必要があるだろう。

中村友博は条痕紋系土器様式の外縁帯とでもいべき浮線紋系土器様式と重複する地域の条痕紋系土器について「荏谷原・柳坪式を設定し

註 1 『考古学ジャーナル』の連載(紅村弘 2005a～c)は紅村自身の論説を振り返り、現在の研究を展望している。

て条痕文土器を体系化すること」を提案した。条痕紋シンポ 85 で設楽博己が提唱した「在地型の突帯文壺」(註2)と無花果形の胴部に細頸でほぼ直立する頸部で口縁部無突帯の壺、氷Ⅰ式の深鉢器形を受け継ぎ細密条痕を施す深鉢を主要組成と言い換えられようか。ともかく、中村の指摘は条痕紋シンポ 85 前後において氷Ⅱ式の認識が流動的であった証拠となろう。その後、『水遺跡発掘調査資料図譜』(永峯編 1998)で宇佐美哲也が「氷Ⅰ式直後段階」を設定し、従来の氷Ⅰ式と氷Ⅱ式の間を連続的な変遷で示した。

条痕紋シンポ 85 以降、石黒は『阿弥陀寺遺跡』の報告以来、伊勢湾周辺の弥生土器編年を精力的に再構築していった(註3)。その後、豊川市麻生田大橋遺跡の発掘調査報告書が愛知県埋蔵文化財センター(愛知埋文セ 1991)と豊川市教育委員会(豊川市教委 1993)から相次いで刊行された。突帯紋系土器から条痕紋系土器にいたる列島屈指の土器棺墓群が公開され、全形の把握できる土器資料で議論が可能となった。ここでは刊行直後に開催されたシンポジウム「突帯文土器から条痕文土器へ」(以下突帯紋シンポ 93 とする)の話題となった「変容壺」を取りあげる。藤尾慎一郎の「深鉢変容型の壺」と「浅鉢変容型の壺」の名称提案(藤尾 1991)を受け、佐藤由紀男は藤尾の指摘する西日本だけでなく突帯紋系土器併行期の東日本にも確認できるとした(佐藤 1993 など)。その後の類例増加などから、伊勢湾周辺に見られる深鉢変容壺は「伊勢タイプ変容壺」あるいは「天保型変容壺」と呼ばれるようになった。

以上、条痕文系土器の定義、条痕紋シンポ 85『研究編』から論点を抽出して研究史を振り返った。ここで本稿の指針を確認しておこう。

まず、条痕紋系土器様式の枠組みを提示する。条痕紋系土器様式の形式、紋様と原体を確認する。土器様式の変遷を示し、各地域の特色を確認する。次に、「内傾口縁の土器」を検討する。広域に分布する状況と意味を探る。最後に、条痕紋系土器様式をめぐる諸問題を提示し、今後の展望とする。

土器様式の概観

(1) 条痕紋系土器様式の定義

まず、条痕紋系土器様式(註4)の枠組みを提示したい。条痕紋シンポ 85 以降、多用されることになった「狭義」および「広義」の条痕紋系土器(石黒 1985 ほか)の両者を含み条痕紋系土器様式としたい。「狭義」の条痕紋系土器は突帯紋系土器様式の東端の土器型式、馬見塚式終末から水神平式を指す。「広義」の条痕紋系土器は、おもに檜王式・水神平式と折衷し、在来型式として定着する南東北から琵琶湖周辺の広範囲におよぶ土器群を指す。

これらの土器群は器面に荒々しい凹凸、つまり「条痕」を表徴とする。条痕はフネガイ科サルボウ・ハイガイの貝殻腹縁を原体とし、施紋具・調整具に多用する。さらにこの貝殻条痕に共鳴して成立した二叉(平行沈線)状工具による条痕、茎類を束ねた簾状工具による条痕も含める。条痕は、器面に荒々しい凹凸を残し、同時期のハケ調整およびミガキ調整と一見にして区別がつく。まさに紅村の「条痕顕示論」の着眼点はここにある(紅村 1980 など)。

つぎに浮線紋系土器様式の「細密条痕」との相違点を確認しておく。「細密条痕」技法の出現は、南東北地域の鳥屋Ⅰ式、大洞A式古段階である。「細密条痕技法」の発生の要因は、東北地方南部における撚糸紋施紋から変化したもので、「手抜き」といった内的な要因がその引き金となったと小林青樹は想定する(小林 1991)。これに対して谷口肇は、「結束松葉」を原体とする細密条痕を自らの実験結果などから立証する。撚糸紋施紋から変化・模倣について、小林の「手抜き」手法に対して谷口は撚糸の「代用」としての「松葉」を(谷口 2004)主張する。両者の見解に相違点はあるが、条痕紋系土器の波及の結果、「細密条痕」紋が成立するとは考えていない。むしろ浮線紋系土器の施紋手法に系譜をもつ、あるいは撚糸紋の施紋から派生した規範として捉えているようだ。いずれにして

註2 『水遺跡発掘調査資料図譜』(永峯編 1998)のなかで中澤道彦は「氷式突帯壺」と呼称し、同一系譜の地域型として「緒立式突帯壺」「沖式突帯壺」も列挙する。

註3 最新の土器研究に対する思考を「中部地方における凹線紋系土器期以前の認識」(石黒 2004)で披露している。

註4 本稿で使用する「様式」は弥生土器研究で多用されている小林行雄の「様式」ではなく、小林達雄の「様式」に拠る。

も、「細密条痕」手法は条痕紋系土器様式成立以前、つまり突帯紋系土器様式終末期から始まっているとみてよい。したがって、突帯紋系土器様式に見られる貝殻条痕手法の共鳴現象として捉えることもできよう。

(2) 形式(器種)

形式(器種)としては、壺形土器と深鉢形土器が主となる。そして、「天保型変容壺」を典型とする深鉢変容壺と「内傾口縁の土器」を伊勢湾周辺の特定形式として加える。

弥生土器に深鉢形土器の形式名をあえて使用するには理由がある。深鉢変容壺は突帯紋系深鉢の頸部がすばまり型式変化する。檜王式に代表される砲弾形の土器は、馬見塚式以前から認められる突帯紋系深鉢の一形式である。これら二者は突帯紋系土器の系譜をもつ条痕紋系土器出現期の主要な形式である。遠賀川系土器の出現以降、西日本全域に壺形土器・甕形土器・高杯など形式分化は明確になる。しかし、突帯紋系土器系譜の条痕紋系土器について、甕形土器の名称を冠することに抵抗を感じる。むしろ突帯紋系土器の頸部が屈曲する器形を甕形土器と呼び、その延長上にある「天保型変容壺」を甕変容壺と呼称するほうが抵抗ない。私は、突帯紋系土器の器形に系譜をもつ二者、すなわち砲弾形の「深鉢形土器」と頸部にくびれをもつ「甕形土器」を合わせて深鉢形土器と呼びたい。

もうひとつ、水神平式土器の口縁部が外反する土器を甕形土器と呼称するのも抵抗がある。やはり、突帯紋系深鉢の延長上に位置付けたいからである。たしかに、遠賀川系甕形土器の影響で口縁部が外反し、「甕化指向」が認められる。豊川流域では内面ハケ調整をする条痕紋系土器もある。弥生時代の甕の一般的な器形イメージとしては、最大径が胴部上位である。条痕紋系土器の場合、口径が胴部最大径より小さくなることはまずない。つまり、深鉢の基本形が最後まで踏襲される。

このような視点で列島中部の甕形土器をみていくと、水神平式の深鉢形土器を系譜にもつ器形が各地域で中期中葉、つまり貝田町式併行まで確認できる。最後の条痕紋系深鉢形土器は美

濃東部において終末期に相当する廻間Ⅰ式まで継続する。

以上、深鉢形土器の名称を使用する理由について、突帯紋系土器の系譜がいかに根強く残存するかを示した。一方、壺形土器については、貝田町式前半(尾張Ⅲ-2期)にはほぼ一律に消滅する。深鉢形土器とは対照的な消長である。

(3) 紋様と原体

紋様

「条痕」を紋様とする認識にたつ研究者は以外と少ない。遠賀川系土器との対立構造を立脚する紅村弘は、「条痕土器」と呼び、「紋(文)」を付さない。増子康貞も同様である。愛知県における弥生土器編年をいち早く提示した吉田富夫は「西志賀第一類(吉田1935)」とよび、その後「條痕紋布痕土器(第二〇圖)」と「繩紋式土器の影響を受けた彌生式土器(第二十一圖3)」を追加して提示する(吉田・杉原1939)。前者は貝田町式から高蔵式の条痕紋系深鉢土器、後者は水神平式の条痕紋系壺形土器である。(吉田1955)では、岩倉市大地遺跡出土の「條痕紋布痕土器」を解説する上で、「弥生式土器に於ける条痕文と言うものは(中略)羽状をなして極めて装飾的に整理せられている(後略)」としている。つまり、器面調整としての刷毛目とは違う紋様として認識し、「条痕文」を用いている。私は吉田の「条痕」に対する一連の記述を拠所とし「条痕」を紋様として理解する。

原体

条痕紋系土器の原体に関しては、明確な同定基準がない(註5)。中村友博は条痕紋原体について、実験と観察を常に繰り返し取り組んでいる(中村1982ほか)。最近は、条痕文土器研究会による研究活動(三河考古学談話会2003)、永井宏幸・深澤芳樹によるレポートがある(永井・深澤2006)。永井らは、貝殻施紋のうち、殻頂部を用いた押圧痕の同定に限定した分析結果を示した。肉眼観察からも想定されていた結果ではあるが、印象材を用いたシリコン型抜き試料の作成、試料を光学写真と電子顕微鏡により観察をおこなった。そして貝化石専門の生物学者に土器資料を観察してもらい検討した。その

註5 横山浩一はハケメ調整具研究の一環として、条痕紋を貝殻腹縁による実験結果を提示している(横山1978)。

結果、岩滑式の壺に用いられた施紋原体の一種は、ハイガイであると同定した。今後、可能な限り印象材などを用いた手法を取り入れて、貝殻以外の原体も同定していきたい。

貝殻以外の原体について、中村友博の研究がある（中村 2000）。中村は、小林行雄の指摘（小林 1930）と佐原眞の分類（佐原 1964）をより具体的に進める。つまり、櫛描紋の原体について、草本類を簾状に束ねた「連体」と想定し、「櫛条痕」についても「連体」工具とする（中村 2000 ほか）。

今後に残された課題は、貝殻なのか、連体なのか、といった原体の同定作業ではない。原体の研究は、深澤が指摘するように、その先にある土器製作時における施紋具の選択理由、施紋方法、入手方法などを明らかにできる（永井・深澤前掲）。

最後に、「條痕紋布痕土器（吉田 前掲）」として古くから注目されてきた「布目痕土器」を取り上げておく。貝田町式の櫛条痕を原体とする条痕紋系深鉢の底部には必ず平織の布目圧痕（註 6）がある。

東日本を中心とした弥生中期の布目痕土器については、大島慎一による集成がある（大島 1996）。櫛条痕による条痕文系深鉢が主体となる地域を囲むように、壺を中心とする条痕文系土器以外にも採用される布目痕土器が分布する。いわゆる広義の条痕文系土器が組成する地域に布目痕土器が存在する。大島は、この分布が浮線紋系土器の広域ネットワークに関連すると指摘する。

「細密条痕」手法の発生にはじまり、前期末から中期初頭にかけて「磨消縄紋」手法の再興、そして布目圧痕土器の顕在化など、南東北地域から発源する手法は条痕紋系土器様式を理解するうえで極めて重要な要素である。

（4）条痕紋系土器様式の変遷

条痕紋系土器様式の出現と終焉を示す。

まず、出現について。条痕原体による器面全

面の施紋（調整）は、馬見塚式終末（尾張Ⅰ-Ⅰ期）^{（註 7）}から認められる。具体的には山中遺跡 SD01 下層と松河戸 SD120 下層の 2 資料があげられる。いずれも壺に深鉢変容壺を含む。したがって、器種分化が不明瞭な時期ではあるが後続する時期に型式的にヒアタスはない。むしろ現状の資料のなかに遠賀川系土器を含まないことを表徴とすべきか。

つぎに、終焉について。石黒の定義に拠れば貝田町式前半までとするべきであろうが、壺の終焉はともかく、美濃東部では深鉢が尾張Ⅶ期（廻間式）併行まで続く（成瀬 2000）。

続いて様式の変遷過程を示す。記述の方針としては、既往の型式名による併行関係の確認、各地域における条痕紋系土器の有無を点検する。これら 2 つの記述により、条痕紋系土器様式の適応範囲を確認することができよう。詳細な土器の特徴を示すことは本稿の主旨ではない。したがって、各様式において注目したい特徴に限り触れていく。

第 1 様式

伊勢湾東岸を中心とした地域、東西三河および天竜川以西の遠江西部、尾張平野から美濃地域で成立する。これを条痕紋系土器第 1 様式の成立としよう。既往型式で示すと、尾張平野から美濃地域および三河から西遠江では、「馬見塚式」の終末から「檜王式」が相当する。これに条痕紋系土器が参入する地域を追加する。換言すれば搬入品が在来型式と補完関係にある地域である。飛驒は「阿弥陀堂式」の後半、中部高地は水Ⅰ式が相当する。第 1 様式の前段階、つまり馬見塚式終末に相当する段階は、東遠江から駿河地域の太平洋岸、甲府盆地では条痕紋系土器様式は成立していない。浮線紋系土器様式第 2 段階（中嶋・渡邊 1989）の地域である。北陸は長竹式後半が併行し、浮線紋系土器様式の範疇にある。もつひとつ注意しておく地域がある。それは伊勢湾岸の西部、伊勢地域である。第 1 様式前段階は馬見塚式終末が確認で

註 6 木葉痕や網代痕は、縄文土器から確認できる。しかし、布目痕は古代の布目瓦や近世御深井焼の型打皿など、土製品に限れば型作りの痕跡として表れる例が多い。大島（1996）によると、西日本の弥生土器に数例確認できるが、継続・広域に分布する布目痕土器は本例しかない。

註 7 本稿は既往の型式（様式）名と『弥生土器の様式と編年』（加納・石黒編 2002）を用いて進める。後者については、土器様式の変遷過程と混同しないように、時期区分に「～様式」を「～期」に置き換えて使用する。

きる。一方、後半段階は条痕紋系深鉢や壺が極めて客体的な出土頻度、つまり搬入品として組成する。ただ深鉢変容壺である「天保型変容壺」の存在は、第2様式に残存することが注目できる。

天保型変容壺の分布は特徴的である。海岸部より内陸部、平野の途切れる山地への入り口付近に多い(石黒 2004)。伊勢側を除けば狭義の条痕紋系土器の外縁帯に相当する。

第1様式後半段階は太平洋岸域の西駿河まで分布する。おそらく隣接する遠江あるいは三河東部地域からの搬入品であり、在来型式としては客体的な位置付けである。

第1様式の特徴は、狭義の条痕紋系土器、すなわち壺形土器と深鉢形土器の器面全面に条痕紋を施す土器組成の成立である。施紋原体は第1様式後半から地域色が現れる。濃尾から三河西部は二枚貝腹縁、三河東部以東は二枚貝腹縁以外の工具を多用するようになる。二又工具(平行沈線)あるいは櫛(簾状工具)が想定できる。三河東部は口縁部と頸胴部界の二条突帯壺が目立つ。

第2様式

中部地方全域および南関東「境木式」～「堂山式」、関東北西部「沖Ⅱ式」～「岩櫃山式」に拡がる、水神平式から岩滑式に併行する時期を条痕紋系土器第2様式とする。

第2様式前半の特徴として、第1様式に条痕紋系土器の搬入品が補完的に組成していた地域に「在地型の突帯文壺」と水Ⅰ式系譜の深鉢が成立する。中部高地および関東方面では中村(1988)が提唱した「荳谷原・柳坪式」と「水Ⅱ式」に水神平式とともに在来型式が形成される。相模地域では本格的な条痕紋系土器の組成が認められる。「堂山式」は「矢頭式」以前の浮線紋系土器様式を残しつつも、在地型突帯紋壺や条痕紋系深鉢と浮線紋系深鉢の折衷土器を生み出す特色をもつ。

北陸「柴山出村式」では依然在来型式との折衷は未確認である。しかし、大地系土器を例にとれば地域間交流は明らかである。すなわち、石川県加賀市柴山出村遺跡・岐阜県八幡町勝更白山神社周辺遺跡・愛知県一宮市山中遺跡の縦羽状沈線を持つ深鉢変容壺の類似点を指摘すれ

ば一目瞭然であろう。

また、この段階には新潟県西部、中郷村和泉A遺跡では「金剛坂式」とともに条痕紋系土器も搬入品として遠隔地までもたらされている。

口縁部外反化傾向が進行する水神平式に逆行する現象もある。一宮市八王子遺跡例に砲弾形の器形、縦位羽状条痕紋を施す、つまり器形は檜王式、紋様は水神平式の特徴を合わせもつ深鉢形土器がある(樋上編 2001「遺物図版 25-166」)。尾張平野部における伝統保守の指向が条痕紋系深鉢に表徴されたか。

水神平式以降の縦位羽状条痕紋、さらに貝田町式の横位羽状条痕紋へ、紋様の方向性は一元化傾向にある。檜王式後半から水神平式段階では壺と深鉢の形式分化も安定し、突帯紋系土器からの脱皮、隣接土器様式との折衷土器も現れる。つまり搬入品として組成していた条痕紋系土器が、在来型式と折衷して地域色をもつ土器として定着した段階である。

第2様式後半段階はさらに地域を拡げて在来型式との折衷が見て取れる。水神平式以降在来型式として定着した地域により東方へ展開、すなわち東遠江から駿河、丸子式とその動向である。例えば茨城県下館市女方遺跡の丸子式壺が搬入されるといった太平洋岸の広域交流の一端をあげておく。

在来型式の条痕紋系土器が北陸地域にも及ぶ。濃尾から三河西部の岩滑式と北陸地域の柴山出村式新段階に興味深い紋様対比が可能である。岩滑式の壺頸部には水神平式の波状紋から形骸化した「J」字の連続した「跳ね上げ紋」と呼んでいる紋様がめぐる。一方、柴山出村式新段階の壺には「J」字の左右反転、つまり「し」字の連続した「跳ね上げ紋」がめぐる。北陸の条痕紋系深鉢は内外面に条痕を施す例が多い。

中部高地、特に中・南部「庄ノ畑式」は条痕紋系土器の頻度が北部「新諏訪町式」に比べ高い。三河西部との交流が継続することと関連する。中部高地以東の再葬墓が定着するのはこの段階で、条痕紋系壺が蔵骨器として使用される例が目につく。

濃尾地域で朝日式の組成に貝殻描紋系土器がある。遠賀川系土器の系譜を引き継ぎ、近畿地域の櫛描紋系土器様式と共鳴してうまれた伊勢

湾地域独自の土器様式である。二枚貝を原体とする施紋指向は条痕紋系土器様式と同調しているようにみえる。しがしながら、遠賀川系土器様式の土器製作システム（深澤 1985 など）を継承していることから、条痕紋系土器様式とは表層、つまり施紋原体の共鳴に留まり土器様式は異なることを確認しておきたい。

第3様式

第2様式を基層とした地域型条痕紋系土器が展開する、岩滑式終末から高蔵式までを条痕紋系土器第3様式とする。この段階から続条痕紋系土器とも呼ばれている（石黒 1985b など）。本様式以降、壺は組成から徐々に消滅し、深鉢が主体になる。第3様式は貝田町式終末期（尾張 III-5 期）を前後して細分できる。前半は中部地方全域に拡がる長頸壺が鍵となる。これを代表する「平沢型壺」の類例は、岐阜県美濃加茂市牧野小山遺跡と愛知県西尾市岡島遺跡を西端に、北は福島県表郷村滝ノ森遺跡まで分布する（武末・石川編 2004）。平沢型壺は条痕紋系細頸壺に磨消縄紋手法が取り込まれた壺である。条痕紋系土器様式の隣接様式との折衷によって誕生した好例であろう。ただし、広域に分布するがゆえに個々の土器は個性的である。第2様式に全盛期を迎えた大地系土器も同様であった。大地系土器は北陸晚期系土器様式に淵源をもつが、第2様式の段階では北陸西部（石川県小松市八日市地方遺跡）と尾張平野（愛知県清須市朝日遺跡）の両地域（2 遺跡）に製作規範をもつ極めて特異な存在である。換言すると、2つの中核的集落が土器製作の規範を導き、各地域で製作使用された容器である。私はかつて朝日遺跡のみが規範を誘導していたと考えた（永井 1994）。現状では2つの集落を想定するが、土器型式単位に存在したほうが理解しやすい。器形・使用法ともに全く異なる土器ではあるが、広域にまたがる土器群のネットワークはおそらく中核となる集落が土器型式単位に存在し、その特定ができれば平沢型壺の複雑な紋様構成も紐解くことが可能ではあるまいか。

この段階は条痕紋系土器様式が隣接土器様式と折衷する例が多い。ところが広域に共通する例も以外と多い。平沢型壺からも指摘できるように、各個体は極めて個性的な紋様構成を持つ

が、磨消手法を取り入れた条痕細頸壺の規範は守られている。石黒は深鉢（甕）における器面の上下分割法の類似性から、北陸・近江・伊勢・中部高地・駿河を比較する（武末・石川編 2004）。私は、水神平式以来の一貫した仮称「水神平型深鉢」の器形に注目する。つまり、第2様式までに在来土器型式と折衷した地域は第3様式前半までは「水神平型深鉢」が主流となる。もちろん紋様など細部については各地域で異なる。ただし「水神平型深鉢」の条痕紋様変遷は、縦羽状条痕（第2様式）から横羽状条痕（第3様式）へ、多条描きから単条描きへ、太描から細描きへとといった大局的な変遷が追える。後半段階では凹線紋系土器の定着する時期を迎えるとはほぼ消滅する。この現象を深鉢器形の基層表徴として捉えるかは今後の課題とする。なぜ北陸地域と琵琶湖周辺、そして伊勢地域では「水神平型深鉢」展開しなかったのか、比較検討も必要である。

第4様式

第4様式は概ね山中式から廻間Ⅰ式併行とする。分布範囲は、美濃中部（関、美濃加茂周辺）に限られる。岐阜県関市砂行遺跡は山中式から廻間Ⅰ式併行を中心とした集落遺跡である。以下、砂行遺跡を典型として議論を進める。尾張から西濃地域にかけての参入形式や他地域からの搬入品のほか、甕（深鉢）・鉢および器台に特徴的な組成がある（成瀬 2000）。第3様式までは櫛条痕の深鉢が主体を占める地域である。

深鉢は頸胴部界が緩やかなものと甕形と似たくびれをもつものがある。いずれも口縁部が長く外反する。前者は底部外面に布目圧痕をもち、後者は木葉痕をもつものもある。器面は細い櫛条痕、おそらく簾状工具を用いて縦方向に施す。前者は口縁端部に刻み目、内面に簾状工具による列点がめぐる。後者はヘラによる端部刻みはあるが、内面の列点はなく、より甕化指向が強い。これに、底部外面に布目圧痕をもつ受口状口縁の鉢と器台が加わる。成瀬正勝は甕としているが、本稿の視点からすれば深鉢形土器である。こういった山間部に残存する条痕紋系土器様式は廻間Ⅰ式2～3段階には消滅する（成瀬前掲）。

「内傾口縁の土器」の検討 (註8)

伊勢湾沿岸域、尾張平野から三河を中心とした地域に、独特の器形をした土器がある。弥生時代前期後半から中期前葉の非常に限られた時期を中心に認められる、条痕紋系土器様式を代表する器種のひとつである。洋樽の形に似た「内傾口縁土器」と火鉢の形に似た「厚口鉢」がこれにあたる。内傾口縁土器は前期後半を中心に、厚口鉢は中期前葉を中心に認められる。中村友博は、これらの土器を「内傾口縁の土器」とし、形式(器種)名あるいは限定した時期の型式名として用いる(中村 1987・豆谷 2003)。

尾張地域を中心に概観すると以下の点が指摘できる。内傾口縁の土器は条痕紋系土器様式の一器種である。尾張地域のように条痕紋系土器が主体とならない地域は客体的な存在である。本来であれば、三河地域、特に西三河において共伴関係を示す必要があろう。しかしながら、内傾口縁の土器に関しては、その初源地が名古屋市南部から東海市の所在する沿岸部であり、厚口鉢の段階にいたっては東三河地域に全く出土しない。かえって尾張地域に出土頻度が高い傾向がある。したがって、条痕紋系土器様式の一器種でありながら特異な生産基盤を想起させる。内傾口縁の土器について、問題点を抽出しておこう。

胴部最大径から口縁部にかけて内側に傾斜する独特の器形であること。時期が下るにつれて、胴部最大径から口縁部にかけて内傾する部位が短くなり、器壁が厚くなる。一方、胴部下半の器壁は薄くなる傾向がある。

使用痕跡として被熱痕が大半の資料に認められること。すなわち、煮炊具としてその用途を考えることが可能である。使用時の煤や炭化物の付着が見られないことは、煮炊きした内容物との因果関係が示唆できる。

器壁の特徴から、外面調整は粘土紐の痕跡を残す一方で、内面(胴部最大径下半)は丁寧なナデで仕上げる。つまり容器の外側ではなく、

内側に機能面を意識した容器である。

完形品としての出土がみられないこと。おそらく、煮炊き後に割ることで内容物を取り出すなど特異な使用法が看取できる。

出土遺跡に偏在傾向がある。現状では朝日遺跡を筆頭に、唐古・鍵遺跡と小津浜遺跡で150個体前後の出土例をみる。そして製作地と想定できる名古屋南部から知多地域および伊勢湾沿岸域を除くと、長野・滋賀・奈良・京都など内陸指向が指摘できる。前者は各地域の中核的遺跡である点、後者は海岸部で生産された土器あるいは内容物が内陸にもたらされている点として注意を引く。つまり海産物に関連する内容物、その最有力候補に塩を想定している。

内傾口縁の土器について、その分布と機能に関して少し詳しく触れた。特異な器形と用途から他地域、つまり愛知県域外で出土する内傾口縁の土器は、すべて搬入品である。決して模倣されたり、変容したりしない。この点が重要である。換言すれば、容器より内容物が重要である。内容物が塩とすれば、焼塩土器の可能性はある。愛知県東海市畑間遺跡は榎王式から水神平式の製塩遺跡が想定されている。隣接する烏帽子遺跡はこれに遡る馬見塚式終末から榎王式にかけての土器製塩関連資料が指摘されている(立松 2006)。

後述する南東北との広域交流が基底にあるとすれば、設楽博己の示唆する太平洋側の広域交流(設楽 2003 など)がさらに深化した議論へとつながる。

条痕紋系土器様式をめぐる諸問題

以上の土器様式を概観するなかで、いくつか派生する議論がある。ここでは今後の展望も踏まえていくつか列挙したい。

(1) 墓制との関連性

広義の条痕紋系土器と重複する浮線紋系土器様式圏および亀ヶ岡系土器様式圏の一部には、壺棺再埋葬が弥生時代前半期の墓制として展開している。設楽博己は「弥生再埋葬が展開する

註8 「内傾口縁の土器」は中村(1987)による「内傾口縁土器」・「内折口縁土器」・「厚口鉢」を総称した名称。本稿も中村の提唱に拠る。

東海地方から南東北地方の福島県までを中部日本と呼称した(設楽 2006)。「中部日本」とは「東日本初期農耕文化を考えるうえでは、縄文晩期終末の浮線文土器の分布範囲であると同時に、初期条痕文系土器と弥生再葬墓の分布範囲という、歴史的に形成された重要な地理上のまとまりである」とする(設楽 2006)。設楽の指摘する空間は、まさに条痕紋系土器様式の範囲とほぼ重複する。

(2) 土器製塩に関連する技術と遠隔地交流

条痕紋系土器様式の一形式、尾張平野南部から知多半島、そして西三河の矢作川下流域を中心に製作されたと考えられる「内傾口縁の土器」。使用痕跡や出土の偏差などから検討した結果、土器製塩に関連する土器として考えた。本来の条痕紋系土器様式の領域を超えて、つまり伊勢湾以西の地域から、一遺跡から多量に出土する例も少なくない。「内傾口縁の土器」の分布と東日本における「縄文系譜の製塩土器」の分布を比較検討し、仮説の積み重ねとなるが、今後の研究課題としていくつか指摘しておく。

突帯紋系土器様式の東端に位置する豊橋市大西貝塚では注目される事例がある。五貫森式の製塩土器と製塩炉と思われる敷石遺構がある。製塩土器は輪積痕および内面の丁寧なナデ仕上げなど東北地方のそれと特徴が類似している。被熱痕や底部丸底などの類似点も含めて製塩土器とする(岩瀬 1996)。

一方、北関東地域を淵源とする縄文時代晩期前半の製塩技術は、晩期後半には東北地域まで拡がり、弥生時代中期まで続く。特に注目したい地域は仙台湾周辺である。縄文時代晩期以降、北関東から南東北の海岸部で発達した土器製塩技術や塩は、隣接する地域間交流で完結してい

たのであろうか。

近年、西日本から亀ヶ岡式土器および浮線紋系土器など東日本系土器の出土事例が増加した(小林 1999・小林ほか 2006)。これらの動向についても射程に入れて、精製土器の内容物を考慮した検討をする必要もあろう。

第3様式における太平洋側の遠隔地交流について、設楽博己の研究が参考になる(設楽 2003 など)。例えば側面索孔回転式鋳頭、南東北の龍門寺式土器などの分布の意味。

(3) 「条痕顕示論」をめぐる

紅村弘と鈴木正博の「利根川論争」(前掲)でも取り上げられた「条痕顕示論」。私の理解を最後に触れておく。

紅村は「条痕」を遠賀川系土器に対する表徴とする。これについては同意する。私は以前拙稿で考えの一部を披露したことがある(永井 2000)。

備讃瀬戸～伊勢湾周辺の遠賀川系壺形土器のミガキと条痕紋系土器の条痕に施紋具(調整具)の違いはあるが、同一の施紋法(調整法)を採用する。つまり、遠賀川系土器のミガキに羽状となるものと条痕紋系土器の縦羽状条痕に類似性を指摘した。この類似した表徴は単なる偶然であらうか。

私は、これらの紋様手法を「文化の表層」として捉え、「模倣の視覚的現象」と考える。さらに付け加えるならば、遠賀川系土器のミガキと条痕文系土器の条痕、両者ともに調整痕と捉えるのが一般的である。私は、両者とも器面の表徴として重要な表現であると考えてるので、紋様として認識したい。ハケメ調整も同様に、紋様の一部として考える。つまり、縄文土器の縄紋地紋と同じ認識に立つ。

参考文献

- 愛知考古学談話会 1985『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編Ⅰ愛知考古学談話会。
 愛知考古学談話会 1988『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編Ⅱ・研究編愛知考古学談話会。
 石黒立人 1985a「〈条痕文系土器〉研究をめぐる若干の問題」『マージナル』No.5, 24-33頁, 考古学談話会。
 石黒立人 1985b「〈条痕文系土器〉の考え方」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』発表要旨, 2-3頁, 愛知考古学談話会。
 石黒立人編 1990『阿弥陀寺遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集)。
 石黒立人 2004「中部地方における凹線紋系土器以前の認識」『考古学フォーラム』no.16, 17-36頁, 考古学フォーラム。
 岩瀬彰利 1996「大西貝塚出土の製塩土器について」『大西貝塚Ⅱ』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書第29集), 85-87頁。
 大江まさる 1965「阿弥陀寺遺跡」『飛騨の考古学』Ⅰ, 19-28頁。
 大島慎一「東日本の布目痕土器」『弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集』, 163-179頁, 弥生土器を語る会。
 大参義一 1954「条痕文系土器について」『名古屋歴史学会会報』第6号名古屋歴史学会。※石黒 1985b から引用。
 大参義一 1972「縄文式土器から弥生式土器へ」『名古屋大学文学部研究論集』LVI 史学 19, 159-192頁, 名古屋大学。

- 岡本孝之 1993 「攻める弥生・退く縄文」『新版古代の日本』第7巻中部, 69-98頁, 角川書店。
- 加納俊介・石黒立人編 2002 『弥生土器の様式と編年』-東海編-, 木耳社。
- 紅村 弘 1949 「西志賀貝塚出土の一土器について」『考古學集刊』第3冊, 32頁, 東京考古學會。
- 紅村 弘 1956 「愛知県における前期彌生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代學研究』13号, 1-9頁, 古代學研究会。
- 紅村弘 1980 「条痕弥生式土器の問題点」『岐阜県八百津町森南遺跡発掘調査報告』, 25-28頁, 八百津町教育委員会。
- 紅村弘 1995 「様式・型式における状況の理論と弥生文化成立の新課題」『王朝の考古学』(大川清博士古稀記念論文集), 32-55頁, 雄山閣出版。
- 紅村弘 2005a 「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容(1) 愛知県における理論と実態」『考古学ジャーナル』No.529, 35-38頁, ニュー・サイエンス社。
- 紅村弘 2005b 「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容(2) 研究の経過」『考古学ジャーナル』No.534, 33-36頁, ニュー・サイエンス社。
- 紅村弘 2005c 「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容(3) アイデンティティの視角」『考古学ジャーナル』No.536, 36-38頁, ニュー・サイエンス社。
- 紅村弘・吉田富夫 1958 『西志賀貝塚』(文化財叢書第19号) 名古屋市文化財保存委員会。
- 小林青樹 1991 「浮線文系土器様式の細密条痕技法」『國學院大學考古学資料館紀要』第7輯, 50-64頁, 國學院大學考古学資料館。
- 小林青樹編 1999 『縄文・弥生移行期の東日本系土器』(考古学資料集9) 国立歴史民俗博物館春成研究室。
- 小林青樹ほか 2006 「特集西日本の亀ヶ岡式土器」『月刊考古学ジャーナル』No.549, 3-26頁, ニューサイエンス社。
- 小林達雄 1985 「縄文文化の終焉」『日本史の黎明』(八幡一郎先生頌寿記念考古学論集), 231-253頁, 六興出版。
- 小林達雄 1994 『縄文土器の研究』小学館。
- 小林行雄 1930 「弥生式土器に於ける櫛目式文様の研究」『考古学』第1巻第5・6号, 100-109頁, 東京考古学会。
- 小林行雄・藤澤一夫 1934 「尾張國西志賀の遠賀川系土器」『考古学』第五巻第二號, 44-50頁, 東京考古學會。
- 佐藤由紀男 1993 「縄文・弥生変換期の壺形土器」『考古学の諸相』(坂詰秀一先生還暦記念論集), 831-852頁, 坂詰秀一先生還暦記念会。
- 佐藤由紀男 2004 「遠賀川系土器と条痕紋系土器との関係性について」『考古学論究』第10号, 15-24頁, 立正大学考古学会。
- 佐原眞 1964 「弥生式土器の製作技術」『紫雲出』, 21-30頁, 香川県詫間町文化財保護委員会。
- 佐原眞 1967 「山城における弥生式文化の成立」『史林』第50巻第5号, 109-120頁, 史学研究会。
- 設楽博己 2003 「統縄文文化と弥生文化の相互交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集, 17-44頁, 国立歴史民俗博物館。
- 設楽博己 2006 「関東地方における弥生時代農耕集落の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集, 109-153頁, 国立歴史民俗博物館。
- 杉原莊介・岡本勇 1961 「愛知県西志賀貝塚」『日本農耕文化の生成』, 355-376頁, 東京堂。
- 鈴木正博 2006 「三河・尾張に於ける浮線文系土器群の編年の位置について」『いちのみや考古』20号, 51-82頁, 一宮考古学会。
- 武末純一・石川日出志編 『考古資料大観』1 弥生・古墳時代土器I, 小学館。
- 立松彰 2006 「伊勢湾における弥生時代の製塩土器」『伊勢湾考古』20, 281-288頁, 知多古文化研究会。
- 谷口 肇 2004 「「細密条痕」の復元」『古代』第116号, 43-85頁, 早稲田大学考古学会。
- 突帯文土器研究会編 1993 『突帯文土器から条痕文土器へ』(第1回東海考古学フォーラム)。
- 中島栄一・渡邊朋和 1989 「浮線網状文系土器様式」『縄文土器大観』4, 343-346頁, 小学館。
- 中村友博 1987 「水神平式土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器II, 119-128頁, 雄山閣出版。
- 中村友博 1982 「土器様式変化の一研究」『考古学論考』(小林行雄博士古希記念論集), 159-188頁, 平凡社。
- 永井宏幸 1993 「条痕文系土器成立期をめぐる諸問題」『突帯文土器から条痕文土器へ』(第1回東海考古学フォーラム), 36-57頁, 突帯文土器研究会。
- 永井宏幸 1994 「沈線紋系土器について」『朝日遺跡』V (愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集), 363-376頁。
- 永井宏幸 2003 「条痕紋系土器研究の現状と課題」『条痕文系土器の原体をめぐる』(第1回三河考古学談話会研究集会資料集), 43-48頁, 三河考古学談話会。
- 永峯光一編 1998 『水遺跡発掘調査資料図譜』水遺跡発掘調査資料図譜刊行会。
- 奈良文化財研究所 2002 「愛知県西志賀貝塚資料」『山内清男考古資料13』(奈良文化財研究所史料第58冊), 1-39頁, 奈良文化財研究所。
- 成瀬正勝 2000 「砂行遺跡における土器の在地色」『砂行遺跡』第2分冊(岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集), 53-62頁。
- 橋本裕行 2003 「奈良県以東地域の搬入土器」『奈良県の弥生土器集成』本文編, 160-172頁, 大和弥生文化の会。
- 久永春男 1953 「解説三河の縄文土器」『豊橋市公民館郷土資料目録』, 13-14頁。
- 久永春男 1966 「弥生文化の発展と地域性 中部 東海」『日本の考古学』III 弥生時代, 162-184頁, 河出書房新社。
- 久永春男・内山邦夫 1965 「愛知県西春日井郡清洲町二反地貝塚の第一次調査」『日本考古学協会第31回総会研究発表要旨』。
- 深澤芳樹 1985 「土器のかたち」『紀要』I, 41-62頁, (財)東大阪市文化財協会。
- 藤尾慎一郎 1991 「水稻農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立』(横山浩一先生退官記念論文集II), 187-270頁, 横山浩一退官記念事業会。
- 前田清彦編 1993 『麻生田大橋遺跡』豊川市教育委員会。
- 増子康眞 2000 「水神平式土器の研究」『古代人』第60号, 51-87頁, 名古屋考古学会。
- 豆谷和之 2003 「内傾口縁土器について」『初期古墳と大和の考古学』, 32-41頁, 学生社。
- 安井俊則編 1991 『麻生田大橋遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第21集)。
- 横山浩一 1978 「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』23, 1-24頁, 九州大学。
- 吉田富夫 1935 「尾張に於ける彌生式文化の型と時期」『日本先史土器論』(考古学評論第一巻第二號), 59-76頁, 東京考古學會。
- 吉田富夫 1955 「弥生式文化研究上の諸問題」『上代文化』第二十五輯, 1-12頁, 國學院大學考古學會。
- 吉田富夫・杉原莊介 1939 「東海地方先史時代土器の研究」『人類學・先史學講座』第十三卷, 1-51頁, 雄山閣。